

▶▶▶加藤 裕治

「巣ごもり」中のテレビから

年末年始は、いわゆる「巣ごもり」で、例年以上にテレビ三昧の日々だった。

「紅白歌合戦」は無観客ながら、多くのスタジオを活用する演出で楽しませてくれた。「良心を束ねて河となす」医師・中村哲「73年の軌跡」は秀逸であったし、「新作歌舞伎『風の谷のナウシカ』」がBSで放送されたのはありがたかった。

そんな中、「芸能人格付けチェック 2021お正月スペシャル」(ABCテレビ・テレビ朝日系列)を数年ぶりに視聴したが、以前とかなり異なる印象を受けた。

この番組は、例えば「千円の安価なワイン」と「十万円の高級ワイン」を出演者が飲み比べ、高級な方を選ぶことに挑戦していくものだ。

以前視聴した際には、その差を見抜けない人間の感覚の曖昧さや、高級・低級の基準が意外にあやふやであることを気づかせてくれる点が面白かった。

しかし、今回、この番組は「決める」ことの「ドキュメンタリー」だと気づいた。出演者は解答を選択する際、誰にも相談できない。周りに人もいないので、他人の顔色はうかがえない。感性だけでは不安が拭い去れず、知識があっても選択が正しいとは限らない。正解発表までの時間も不安だ。

この番組は一人で「決める」ことが、いかに困難かを見せてくれる。だから私たちが「決める」際には、ついつい「他人の顔色」をうかがってしまうのも理解できる。多数が支持する方を選ぶのが確実だと。ただし、それがいわゆる「忖度」を生み出す。

では「決める」には、どうしたらいいのか。今回、有名ダンサーを選ぶ問いがあったが、出演者の一人は「好きで、(そのダンサーの)動画を普段から見ている」として、確信を持って解答を選んでいった。

つまり「決める」とは、普段からの観察や知識の積み重ねが重要なのだ。それでも間違っかもしれない。しかし、普段からの準備が「決める」の背中を押してくれる。

この番組は、バラエティーとしても今の時代を考える上でも、興味深いものだった。

(静岡文化芸術大学教授)

2021.1.10

中日新聞(朝刊) P.5